

藤井裕久民主党名誉顧問に聞く2

二〇一三年一月一八日（金）

港区白金台の事務所にて

聞き手

尾崎美千生 元毎日新聞政治部副部長 高連協参与

堀内正範 朝日新聞社社友 「月刊丈風」編集人

前回の昨年一〇月には霞が関の議員会館におたずねした藤井さんにお会いするため、今回は尾崎さんとふたり、一月一八日午後、雪の残る白金台の細道をたどって事務所におたずねした。

一二月一六日の総選挙で民主党は惨敗した。

その主要な要因のひとつとして、藤井さんのような優れた高齢議員を比例名簿のトップに置き、高齢者三〇〇〇万人（票。六五歳以上。有権者三・五人にひとり）に呼びかけて、「日本長寿社会（高齢社会）」を形成すると、経済成長をもたらす政策、マネフェストの「人」の活力に期待する政策を掲げえなかった結果であると、ひそかに結論づけている。それは国際的にも注目されている「日本高齢社会」形成への道に渋滞をもたらした。

高齢者の持つ潜在力を活かして経済成長を呼び起こすにあたって、政治の側が動くには、藤井さんのようなベテラン議員の方々の参画を必要としている。今回は「高齢社会」に関する事に絞らずにご意見を掲載したい。

・継続する仕事

尾崎…藤井先生がこれからも続けられるお仕事は？

藤井…個人的には「勉強会」です。いまの若い議員は政治史はもちろんです。経済も歴史的に見なければいけません。その「勉強会」の座長はやらせるといっています。あとは付き合いが深くなった「三党合意」がありましたから、与党（自民党と公明党）から出てくれるようにいわれていますが、これは表には出ません。これからは野田（毅・自民）と斉藤（哲夫・公明）と松本（剛明・民主）の三人でやることになると思います。それから党のほうからは会議なんかに残ってくれるよう念を押されている。

尾崎…「近現代歴史調査会」は先生のほうから。

藤井…そう、個人の意向として「近現代史」はやらせるようにいつてあります。二番目のは与党の意向、三番目のは党の意向です。

・選挙制度の改革

尾崎…われわれが勝手に判断して、藤井先生が引退するのは早すぎるということになった。

藤井…八〇ですよ。

尾崎…参議院に残ってそのあり方にも貢献していただく道があるのではないか。

藤井…選挙制度ではいま中選挙区云々がありますが、自民党の森（喜郎）さんと近く出る『中央公論』の対談で話し

ましたが、わたしは自民党を離党して小選挙区制をやったときのひとり。実際にやったのは羽田孜ですが、これにはふたつの理由があった。ひとつは自民党に派閥があつて複数で出る。強いから同じ自民党で政策的に賛成するのと反対するのとふたりが通る。

堀内…ありえますね。

藤井…ありえるどころかほとんどがそう。通つて東京に出ると親分にいわれてふたりとも賛成派になる。つまり有権者を裏切ってしまう。もうひとつは金。中選挙区だと市が三つあれば事務所を三つ、そこに職員を置く。小選挙区だと一つ置くだけですむ。「ほんとに安くなりました」という議員の声を聞きます。森さんにこの話をしたら、彼はむしろ小選挙区反対論者ですから、それは羽田のようにめぐまれた立場だからいえることだ、という。森さんは無所属で苦労した。

尾崎…わが国の選挙制度も紆余曲折をたどっていますね。藤井…歴史的にいうと、中選挙区制にしたときの内務大臣は若槻礼次郎。かれは、明治・大正は大選挙区と小選挙区をやった、しかし完全なものではなかった、だから真ん中を取つて中選挙区にした、そう趣旨説明でいっています。どんな制度も絶対にはいいものはありませんよ。大選挙区は山県有朋のときにやった。これは政党ができないしくみ。戦後すぐ大選挙区をやったけれど、いろんなのが出てきて政党ができなかった。小選挙区は伊藤博文と原敬です。これはまちがいなく二大政党論者です。そういう歴史的背景が

ある。だから参議院も含めて白紙で議論したらいい。森さんはわれわれはむかしを知っているから中選挙区がいいというが、いまのやつはいまの選挙制度で勝つたのだから改革に賛成しないという。いまの制度で勝つたら変えませんか。一〇〇票でも勝ちますね。『中央公論』の対談で司会者の時事通信の人が「現役政治家にまかせたらだめなのは」といった。そうしたら森さんは「学者にまかせたらなおだめだ」といった。司会者が「では、あなたたちで作つたらどうですか」。もう少し加えて経験者グループをつくつてやつたらという。森さんは「いいですね」。誌面でどう扱われているかわかりませんが。

・二院制のあり方

堀内…別の角度からの国民の代表が議する場としての参議院という意味でいえば、その経験者グループの方々によつて基本的なところが議論されるのはいいですね。藤井…戦後に「一院制にしろ」とマッカーサーがいった。それに対して幣原喜重郎は、日本は戦前には貴族院があつて、それなりにチェックしていたと主張した。いいチェックとはいえませんが。貴族院は保守反動のかたまりみたいなところだったから。二院制ですから参議院はねじれなんではないか。二院制でいい。それがあたりまえ。同じだつたら一院制しかない。それをいつたら参議院に呼びださず、謝ませられたことがありますか。

藤井…西岡（武夫・元参議院議長）さんがまだ生きていたところで、本人は直接出てきませんでしたけれども、参議院の議運で謝ませられました。違うことをいうのが参議院。わたしは基本的には参議院はオール比例区、衆議院はオール小選挙区。これはひとつの案と思います。しかし今年の六月までには無理ですけれども。

堀内…参議院議員の選び方としては「枠」がいいのではないですか。「女性枠」とか「高齢者枠」とか「地方枠」とか「分野枠」。もちろん人を選ぶのは国民ですが。藤井…それはひとつの考え方です。われわれは「じじい枠」ですか。

堀内…ただし「若い人の枠」も。三世代にわけてつくって、若い人でもこちらが都合のいい人はくればいい。

藤井…参議院では選挙区をやめてオール比例区でやる。それならわかります。ある意味でわたしの考え方と重なっている。尾崎…ぼくらの参議院についての議論は、まず藤井さんのような経験のある方が残って参議院でやっていただきたいということですよ。

藤井…先の衆議院選で全国をまわりましたが、安倍さんの国家論ではだめといいましたら、「あんた参議院に出ろ」というヤジが出ました。

堀内…それは理屈に裏表があるけれど鋭い発言と思います。このままいったら二院制が崩れて意味がなくなる。藤井…比例区が両方にあつて二院制はおかしい、権限より

選挙制度を変えないかぎり、同じことになってしまう。

・小選挙区制のメリット

尾崎…もともと藤井先生は小選挙区を推奨する立場でしたよね。

藤井…羽田孜が選挙制度調査会長だったとき、ぼくは小沢（一郎）さんとか羽田さんと自民党から出たのですから小選挙区論者です。表は羽田さん。わたしは小沢さんいわれて羽田孜を代表に説得した。代表が羽田孜で、小沢さんは自分では表に出なかつた。いまでも中選挙区制にはふたつの理由で反対です。わたしの神奈川の選挙区の場合だと、自民党が強いと党内で意見が割れても二議席とれる。多摩川を渡ったとたん一本になってしまう。これは選挙民への裏切り。それに金がかかる。このふたつをなくしたことで小選挙区制がいい。中選挙区制云々という話があつたら、さっきの若槻礼次郎の話をして、ぜったいにいいという制度はないのだから白紙で議論したらいいといった。したら『中央公論』の対談で森さんは重ねて学者はだめだといった。

堀内…政治家から見えている範囲の学者はだめですね。隠れているところにいる。政治家のほうに寄ってきている学者はだめでしょうね。

藤井…みんなだめです。例にあげますが、浜田（宏一）は学者としてけしからん。あるところまで物価があがつたら日銀が抑えればいい。リフレーション、つまり統制あるイ

ンフレ政策ができるという。それはできないことで、行き着くところまでいく。わたしはテレビで何度か言ったのですが、三重野（康・元日銀総裁）さんはバブルを抑えようとした。そのときは金丸信と渡辺美智雄が国会で金融対策を徹底的に批判した。結果として、やれといった人が命を絶っている。金融が悪いほうに動く、最後はやれといった人が命を絶つまでいく。これがインフレなんです。

・参議院議員から衆議院議員へ

尾崎…参議院のほうの改革のことですが。

藤井…六月までという期限ではむずかしいが、抜本改革の必要はありますね。おそらく衆議院の〇増五減とか比例定数四〇減とかいう目先のことをやるだけ。二院制の意味は何なのかには答えられない。衆議院では昭和五八年から完全な比例区を入れたのですが、そのとき角（田中角栄）さんに、「参議院をやめて衆議院にこい」といわれた。「衆議院の比例区ですか」と聞いたら、「あんなものはなくなる。過渡的に衆議院の人数を減らす手段として比例区をつくっておくだけだ。おかしいという意見が出てどんどん切っていく」といいました。だから「小選挙区で戦え」と。

堀内…藤井さんとしてはびっくりされたでしょう。藤井…びっくりしました。鳩山威一郎に引っ張りだされて参議院にいましたから。鳩山さんは「参議院議員として育てたかったんだよ。角さんがそんなことをいうのか、わたしは反対だな」といっていましたが、あの人も政治では角

さんの弟子でしたからね。

堀内…参議院から移ったあとの藤井さんの衆議院でのお仕事はたいへんでしたね。衆議院で改革を模索する政党を右に左に上に下に。参議院のほうにいたほうがよかったかどうかは別にして。

藤井…行ったり来たりがいいとは思いませんが。いま民党の中核で活躍している人も石破（茂）、野田（毅）、高市（早苗）もそう。表に出ているのは行ったり来たり組です。生粋の自民党の森喜郎にいわせると、石破だけは理屈ばかりで信用できない。森さんは情の世界の人。

尾崎…今度の選挙は、先生ご自身ははじめからやるつもりはなかった。

藤井…もう平成一七年に落ちたときから、後継者も決めて。4 弁解のようでいいにくいけれど、平成一九年に比例区で空いたから繰り上げ当選。どうすりゃいいんですかと聞いたら総務省がいうには、三つの理由でなければ繰り上げ当選はやめられない。ひとつは死ぬこと、それから離党すること、あとは除名されること。ひとつ目は論外。民主党とここまでできたものとしては離党したくない。除名はしてもらえない。それで平成一九年は繰り上げ当選しました。次の平成二一年の選挙では鳩山由紀夫が財務大臣になってほしから名簿に載ってくれ。おしりの方に載ってくれたから間違いなく落ちると思っていたら、ぜんぶ入っちゃった。だからやめたい気持ちは平成一七年からありました。尾崎…こんどの選挙では後継者の方は？

藤井…繰り上げのトップになりました。さっきからの参議院の話、これは考えてもいなかったことで。

尾崎…ルールがあつて出てはいけない？

藤井…民主党にはそんなルールはありません。自分でいやだといった。

尾崎…この前の選挙のとき、わたしの千葉二区では黒田(雄)さんが小沢派に移つて樋口(博康)さんが出た。樋口さんが見えて友人を紹介なんかしたので、実は藤井さんにお世話になつていてという。

藤井…「近現代歴史調査会」です。再開するにあつて事務局を頼んであります。

尾崎…樋口さんは習志野、八千代、花見川で先生にお願いして勉強会をやりたいとか。

藤井…言われました。一般の人も呼んでやりたいと。

・「近現代歴史調査会」のこと

尾崎…民主党のなかにも近現代史を学びたいという人が多いのですか。

藤井…国会議員で常時出てくるのは一〇人くらいですが、一般の人で満員。そこで今度の「近現代歴史調査会」は登録制にした。あんたはだめといった例はありませんが、そのほうが自意識を持つてくださる。マスコミの人もぜひぶん来ますし、講師になつてもらっています。朝日新聞の早野(透・桜美林大)には、「マスコミはなぜ戦前墮落したか」で話してくれといったら、ちよつとタイトルを変えてほし

いという。「なぜマスコミは戦争をやめさせられなかったか」と、これならやりますということ。非常にいい話をしてくれましたよ。

尾崎…こんどは経済史を中心にして。

藤井…「近現代歴史調査会」は政治史です。ただ税調では経済史も学ばねばといいました。なぜ消費税か、いまなぜやるんだというような経済の経緯。四〇年前から水田三喜男さん、そして大平(正芳)、中曽根(康弘)、竹下(登)さんへ。その経緯を話した。経済史も大事です。

・野田首相の解散権

尾崎…藤井先生は総選挙はさいごまでやらないほうがいいといつておられました。野田さんは年内に決めてしまひました。

藤井…わたしの意見は知っているな、と。知っていますと言つていました。しかし解散権は総理の専権事項だから、すべての責任を総理として負えばいつでもいい。なぜあの時期にとつたことでは、彼の性格からいつて、まちがいない。自民党と公明党に対して「三党合意」への恩義があまりなかったから。野田だけではできなかった。ただし「近くやる」なんて言わなければよかった。言つた以上は「近く」には来年というのは頭になかった。

尾崎…そういう意味では残念な結果になった。藤井…専権だったのだから、すべての責任と結果は野田にある。だから野田はいまでも人の前に出ない。いやがつて

いる。謙虚というか、立派な人も落とすという反省がある。大平さんの女婿の森田（一）が野田の激励会をやるうといってきた。大平さんのことを学んだ森田が激励してやるという招きを受けないのはまずい。愉快にやりましたよ。藤村（修・元官房長官）も呼んでどんちやかやりました。

尾崎・野田さんは大平さんと昵懇だったのですか。

藤井・水田、田中、福田（赳夫）、大平、愛知（揆一）さんなど、警咳に接した五人の話は酒飲んではいましたから、五人の中では大平さんに惹かれたんでしょう。ですから森田のところに行ったのでしよう。大平さんは「環太平洋構想」をやった。それが「APEC」になり、そしてその実行版が「TPP」。そんな古い話はしないで森田といっしよに激励した。野田にこれを機に表に出たらいい、テレビまで出る必要はないが、党内の重みのある発言は何かといいなさいといった。飲んでいたからいやだとはいわなかった。

・「人生六五年」から「人生九〇年」時代へ

尾崎・わたしも参加している高連協（高齢社会NGO連携協議会）としては、政治の世界で「高齢化」の問題をもつと取り上げてもらおうと考えています。わたしたちとしては、参議院の改革を含めて藤井さんにも参加していただきたいと思って。

藤井・「高齢化」に対しては、前回も申しましたが、自由党のときに「消費税」を高齢者福祉の完全目的税とした。連

立与党である自民党の宮沢大蔵大臣にお願いして「高齢者3経費」（基礎年金・老人医療・介護）として完全目的税とした。宮沢さんが予算総則（平成一年）に書いてくれた。そのあと子育てをいれて4経費になり、もうひとつ医療費は高齢者だけでなく一般医療費にも使えるようにした。こんどの消費税の「三党合意」はその筋でできている。

堀内・宮沢さんはよく先をみてくれましたですね。

藤井・連立与党の立場としてよく聞いてくれました。

堀内・財政的に高齢者に手厚いのはいいことなのですが、高齢者が年々ふえても政治の側が「高齢社会対策」としての構想を掲げて対応してこなかった。その結果として高齢者の知識や技術や資産が潜在的に滞ってしまっている。

藤井・一五〇兆円が眠っている。

堀内・そういう状況をつくってしまいましたですね。

藤井・ひとつは贈与による減税。これから自民党内閣がやってくればいいと思っています。おれおれ詐欺にいくよりはいい。

堀内・われわれ高齢者が資産を子どもたちに使うのは三分の一はいいですが、三分の一は高齢者が高齢期の暮らしを充実させるために使う。仲間とうまく社会参加して使えば新たな経済効果を生むことになる。高齢者は自分たちの人のためになぜ使おうとしないのか。

藤井・できないのではなく、発想がない。

堀内・そういう発想は政治家にもないのですか。とくにすぐれた高齢政治家にお願いしたいのは、高齢者を現役とす

る将来構想を掲げるといった「高齢社会対策」なのです。

藤井…それを言い出した人はいません。

堀内…どうしてでしょうか。

藤井…わかりませんが、要するにお年寄りを使わないという前提があるんですよ。

堀内…そういう前提でみんなが年をとっていつてしまう。

藤井…使わないだろうというのに、なぜですかというご質問であれば、答えはそれしかありません。若い人のほうには需要がいつぱいあるのだから、手つとりばやいというのが発想です。

堀内…われわれとか、われわれより上の人たちは自分のセキュリティを考えるよりみんなのために働いてきたしそういう暮らし方をしてきた。高連協代表の樋口（恵子）さんは「一〇〇歳時代」の初代として高齢者が安心して暮らせる社会をつくる役割がわたしたちにあるという。

藤井…女性の樋口さんですね。

堀内…昨年、有識者と官僚が見直した「高齢社会対策大綱」での重要な指摘は「六五年人生」に代わって「九〇年人生」への意識改革です。それを自分のものと考えれば二五年ある。その二五年を「余生」で過ごすのではなくて、みんなでなにかを考えて、自分が持っている知識と技術と資産をつかって「現役シニア」として自立して暮らす。長寿として得た期間をみんなのために使ってくださいというのが一九九九年の国連の「国際高齢者年」のメッセージだった。この国ではどうしてか持っている能力を活かせない。

藤井…これは大事ですね。日本の高齢者の技術は高度です。

先端技術のことばかりいいいますが、わたしは「匠」の技術こそが大事だといっている。床屋さんでいい、料理人でもいい。これが活きる社会にしなければ。これが「新成長戦略」です。それにどういいう金をつけるかについては、たとえば外国にいくのに対しては補助をつけている。南洋にいつて寿司屋をやっている人は相当いい生活をしている。

・高齢者の潜在力を活かす

堀内…国内で、地域や職域での高齢者の存在感の欠落が国力のデフレーション（萎縮）です。経済のデフレはみんなに判かりやすいけれど、年々高齢者が多くなつて、一人ひとりが萎縮していく。これが国力を弱くしていることはたしかです。現役の若い人とともに現役の高齢者の活動として存在が見えてこない。

藤井…個別にやっている人はやっていますよね。八〇であろうと九〇であろうとやっています。

堀内…それを政治の側がなんとか、モノやサービスづくりやコミュニティをつくるのに支援するとか。

藤井…一生懸命に考えますよ。「高齢者雇用安定法」もそうですが。どんどん出ていく人もいるし、もうおれはヤダという人もいます。

堀内…「シルバー人材センター」ですが、集まっている仕事というものが、この人たちがやる仕事ですかというレベルの仕事が多いです。だったらその人たちに考えてもらって、

すぐれた知識も技術も持っているのですから、それを使って何か公園の管理にしろ、里山や街並み保存にしろ、特産品づくりにしろ、なぜやれないのか。これは政治、地方政治の仕事だと思えますが。

藤井「高齢者雇用安定法」はそれに答えてはいるんですよ。手とり足とりはやりませんがね。あとは好きにやってください。会社の場合は勝手に首を切るのはやめて、必ず六五歳までは居られるようにする。非正規にするのはやっさいけれど。

堀内「わたしは情報のありようをみていますが、製品としての出版物を若づくりのものや女性向きのもの中心にしてしまつて、高齢社員が自分たちのためあるいは将来のための製品をつくることをしない。定年延長はいいのですけれど、新たな仕事をつくる意欲を削いでしまう。」

藤井「それを政治にやらせるんですか。」

堀内「いえ、これはそれぞれの分野の企業がやることです。藤井「それだけの力が高齢者にあるのだから、力のある企業はやっていきます。たとえばデパートでは高齢者センターというのをつくっていますね。ああいうのはお答えしているひとつなんですしょうね。そのうえで公がどうはいるかという話です。」

堀内「将来構想は政治家は政治の場で、学者やジャーナリズムもやらなければならぬ仕事ですが。」

藤井「企業人としては大きな需要が高齢者にあることはみんなよく知っています。それを政府で後押しするという話

です。」

堀内「それがひとつ。それと若手の現役が考える高齢者や高齢社会であることです。政治の側でいえば五〇代の野田さんもわかっていない。企業でも現役世代が自分たちの先輩、六〇や七〇歳の人たちの暮らしや人生は分からない。藤井「そうですね。企業人というのは金もうけだから需要があればそこをやるうと考えると思っていました。が、そうでもないですか。」

堀内「実際に求めているものとずれる。それは最後は高齢者の側の問題なんです。高齢者が現役意識で参加できていない。生活者としての存在感がやっぱり薄いですね。」

尾崎「この前、野田さんが新しい「高齢社会対策大綱」をつくるときに、これは十何年ぶりに改定したのですが、お八年寄りの消費活動をもつと考える、それは答申の中にちゃんと入ったのです。経済できゅうきゅうとしているのだから、元気なお年寄りをもつと使う。消費もそうだし労働するほうもそう。そういう社会をもうちよつと考えていい。藤井「それは大事なポイントですね。そこで公がどういう形で入るかが問題なんです。」

・年齢差別禁止法の制定を

尾崎「雇用における年齢差別禁止法」ですか。あれを日本でもつくつたほうがいいんじゃないでしょうか。」

藤井「なるほど。」

尾崎「アメリカとかEUではすでにやっている。」

藤井…「高齢者雇用安定法」などで間接的に段階的にはやっているんですね。

堀内…年金とつなげる六五歳までの定年延長を推進することとで苦勞をしている段階。

尾崎…選挙でも「高齢化」をいうのですが、最後まで具体的にこうやろうとっている人がいない。そういうことで「勉強会」をやろうかということですが、藤井先生ひとつ参加していただけませんか。げんきな高齢者をもっと活用する社会をつくらうということなんです。

堀内…意欲があっても三〇代とか四〇代ではむりですね。藤井…自分が高齢者になったときの発想ができない。ただし金もうけの対象としては、企業人としてやっている。これはまだわからないけれど、細川護熙と前から接触しているんです。野田を引っ張り出そうということでも。いまのことはポイントのひとつなのですけれど、関心は「環境」なんです。何もかもというとうまくいきませぬので、自然環境の保護からということ。自分たちでやるので出てきてほしいという。ぼくは組むつもりです。ただね、流れは高齢者よりも環境に向いている。

・世代間はウイン・ウインに

堀内…高連協というのは、ほんとうは高齢者みんなが知っ
ていていい組織で、前世紀末に福祉に関係する団体が中心
になって一九九九年の「国際高齢者年」の行事をやった。
そのあと参加した四〇ほどの団体が集まって結成した。福

祉中心ですが幅ひろく高齢社会の仕事をしてきています。高齢者の活動を差別しないためには雇用での高齢者に関する年齢制限をなんとかしようという。

藤井…定年退職したあとの日本の高齢者にはたしかに高い技術があります。旋盤工だって日本のレベルが高い。

尾崎…政治家については小泉さんのときに中曽根、宮沢さんに引退していただいた。あれはいまどうなんでしょう。

藤井…中曽根さんはいいい気持ちは持っていないでしょう。堀内…宮沢さんのように幅広い国際感覚のある人が参議院に一〇人もいらつしやったらぜひぶん発言力がちがう。

尾崎…若い政治家が育つことは大事だけれど、「高齢社会」の形成にとつては藤井さんのような方が政治の現役の場を退かれることはマイナスになる。

藤井…参議院の改革は文書では約束はしているのですが、単なる削減の話で終わってしまう。二院制といつても外国はイギリスは貴族院だし地方代表とか、それぞれに質的にちがいますから。

尾崎…世代間の格差がいわれるのですが、高齢者の側から自分たちのこととともに若い人たちのことをもっと考えなければならぬ。われわれの代表の堀田力さんは世代間の関係は雇用の関係なんかもウイン・ウインでなければならぬ。

藤井…それは大事な話。そうでしたね、堀田さんがやっているんですね。

堀内…堀田さんは被災地でも具体的に「地域包括ケア」を

考えてやっておられる。医療・福祉を地域の核にして自治体と高齢者みんなが包括して活動する。
藤井…そこでの元気な高齢者の役割は。
堀内…若い福祉の人も必要ですが、同世代として参加して地域の暮らしの問題を共有する。
藤井…同世代の会合は大事です。みんなで「美空ひばり」でなつかしく話し合える。

・おわりに

尾崎…では、そろそろ。いろいろご計画はあるかとは思いますが。
藤井…わかりました。たいへんいい話で。議員なんかにならずに、これをもとにして細川さんなんかと話し合ってください。
堀内…細川さんは昭和一三年生まれで七四歳。藤井さんと離れた考え方をしている人ではないですね。
尾崎…わたしたちも「近現代歴史調査会」に参加させてください。
藤井…事務局長は階（猛）です岩手県。樋口が事務局です。議員でくるのは一〇人程度で少なすぎますが、ほとんど落ちてしまいました。樋口にいつて登録して参加してください。わたしは自由人になったからといって何もやらなようなことはいたしません。
堀内…最近、成田市に呼ばれた会合がありました。「明鏡止水」は政治家「明鏡疲れず」という話をしました。「明鏡止水」は政治家

もよく使いますが「明鏡不疲」。
藤井…「疲れず」ですか。
堀内…はい。鏡は磨けば磨くほどよく写る。優れた人は明鏡のようだし、多労でも疲れな。おおいに利用しましょうといったとき、藤井さんのお名前を使わせていただきます。「明鏡不疲」でよろしくお願いいたします。

・・・

二〇一二年の年末に政権交代があつて、総理大臣が自民党の安倍晋三さん（五八歳・一九五四年）に変わったが、残念ながら「所信表明演説」（二〇一三・一・二八）には「高齢社会対策」はなく、優れた先達に援軍を求め難局を乗り切るという「人々高齢者参加による社会改革」構想はないようである。

金融と財政によるアベノミクス効果は一過性のものであり、その反動を食い止めて成長を持続するには、国民の側の活力のフォローが必要となる。
成長というと、若者による「成長」力ばかり強調され、年々増えて三〇〇〇万人に達した高齢者（六五歳以上）の持つ「成長・成熟・継承」力を軽視してきた。長年かけて培った知識・技術・経験、そしてほどの資産を保持している高齢者層の潜在力を社会的に有効に活かす暮らし方を提案するのは「高齢社会対策」であり、国際的に注目されている「日本長寿社会（高齢社会）構想」を掲げるのは政治の側の役割である。

（二〇一三・二・七記 堀内正範）